

『花上集』について

今 泉 淑 夫

はじめに

『花上集』は室町中期五山詩僧の七言絶句のアンソロジーである。続群書類從（第十二轉下）に収む。序は彦龍周興の『半陶文集』にも収め、横川景三の命名する書名の由来と、僧某が建仁寺の少年僧文挙契選のために編んだことを記す。通説でこの集が文挙自身の編とするのは一考を要する。『大日本史料』第八編之三十二、学藝雑載に「序」を収める際に、そのことが気掛りで諸本を参考する間に、同集について寸考することがあつた。以下にのべる如くである。

—
作者と作品の題は第一表に列記した。慶應義塾大学付属図書館の一本⁽³⁾は、作品の順序と題、文字が続類從本と異なる部分があつて、別系統の写本群が存したことと同わせる。参考のために併記する。作者廿員はすべて横川の『百人一首』に含まれ、作品も重複するものがある。後年如月寿印の編著になる『中華若木詩抄』とも重なる詩がある。当時における作者、作品の世評と本集全体の水準を語る。
七絶の集であるのは、これが当時の詠詩基準であつたことに依る⁽⁴⁾。選

んだ詩の個々の評価に關しては参考のあつたことが推測される⁽⁵⁾。作者の構成上にいくつかの特色がある。

第二表に作者を法系別にみた。多岐にわたって、門派を特定することはできない。「序」に「近代諸老」とする世代は、第三表によれば、義堂・絶海から九済・希世に至る特定年代の人々である。希世を後限としたのは、後述する如く、編者の判断がなればなるまい。人々は將軍足利義持を中心とする「応永年間の文雅の友社」の有力メンバーと、後続する義政時代の詩僧たちである。むしろグループを選定基準としたことが考えられる。

交渉関係を整理した第四表によれば、あらまし、義堂に指導された相國寺友社と、絶海の建仁寺友社に属する。当時詩壇は両社が中心で、その中核に惟肖と江西がいた。

希世靈彦が瑞岩龍惺のために著わした「蟬闇外藁序」は瑞岩の詩を語つて当時の詩壇を要約した卓越の文章であるが、この中に、予嘗及見前輩以詩鳴于四海者、龍阜為蕉雪⁽⁶⁾、在則吾謂吾徒之有詩矣、蕉雪既亡、則吾謂吾徒之無詩矣、然則玉府有統翠焉⁽⁷⁾、又有能詩没、則吾謂吾徒之無詩矣、⁽⁸⁾、

とのべて、二人の
存在を強調する。
三条西実隆の日記
にも、正辨という
僧の話として、

心田ノ詩ハ初

心者非可学

之、江西詩初

心者可学之、

但心田ハ猶有

得風骨之妙

處、惟肖詩言

語道断也、此

也、⁽⁹⁾

事尊宿之評

とある。希世の文
は、ここに尊宿が
評した惟肖と江西
の対照的な詩風を
指して、吾徒に詩
ありとのべたもの
である。

後世の評にも室

町期の学藝詩壇を
要約して、「當時
以得岩^{号惟}文、龍派^{正辨}

作者名	統類從本ノ作品 順序ト題	慶大本ノ作品 順序ト題(異 題ノミ)	「百人 一首」 ニ収ム モノ	「中華若 木詩抄」 ニ収ム モノ	作者名	統類從本ノ作品 順序ト題	慶大本ノ作品 順序ト題(異 題ノミ)	「百人 一首」 ニ収ム モノ	「中華若 木詩抄」 ニ収ム モノ
瑞岩龍惺	7. 淡墨海棠	7.	○		九洲龍溪	9. 宮漏	9.	○	
	8. 戴遠破琴圖	8.				10. 畫薇薔	10. 畫薇薔		
	9. 木犀枝上白頭	9. 白頭公				1. 賛王昭君	1.		
	10. 公園	10.				2. 寒林独鳥圖	2.		
	1. 白闇鳥	1.				3. 潮上春退	3. 潮上春退		
	2. 煙寺晚鐘	2.				4. 山寺晚鐘	4.		
	3. 詠李太白清平	3.				5. 新陰勝花	5.		
	4. 歲晏小集	4.				6. 采蓮花	6.		
	5. 淑明画像	5.				7. 冬日牡丹	7.		
	6. 賛杜甫像	6.				8. 山村春意	8.		
瑞溪周鳳	7. 松下彈琴	7.				9. 莘春曉夜雨	9.		
	8. 官閣看山	8.				10. 人生識字憂患	10.		
	9. 三友齋	9.				1. 始	1.		
	10. 鈞月亭	10.				2. 韓王堂雪	2.		
	1. 繁縫	1.				3. 夏山欲雨	3.		
	2. 潛湘夜雨	2.				4. 禦鐘	4. (コノ間ニ)		
	3. 桃花蒼鷹圖	3.				5. 未開芍藥	5. (白母香山)		
	4. 墨菊	4.				6. 杜甫醉像	6. (アリ)		
	5. 竹籬野桃	5.				7. 詠范石湖菊譜	7. (8)		
	6. 桃花馬	6.				8. 還詩軸	8. (9)		
東沼周嚴	7. 詠荊公桃源行	7.				9. 畫軸	9. (10)		
	8. 微蓄洞圖	8.				10. 宮槐	10. (11)		
	9. 滴星觀	9.				1. 題明皇芙蓉野	1.		
	10. 詠廬山高	10.				2. 猶國	2.		
	1. 江天景雪	1.				3. 秋色帰思圖	3. (帰思圖)		
	2. 洞庭秋月	2.				4. 送僧遊廬山	4.		
	3. 潛湘夜雨	3.				5. 描練圖	5.		
	4. 君山圖	4.				6. 蘭竹圖	6.		
	5. 觀瀑亭	5.				7. 紅梅	7.		
	6. 明皇橫笛圖	6.				8. 蒲菊	8. (蒲菊)		
九鼎竺重	7. 賛諸葛孔明	7.				9. 藍染河	9.		
	8. 山路桜雪	8.				10. 思河	10.		
	9. 連理梅	9.				1. 臥鐘	1.		
	10. 賛潤明	10.				2. 詩灯	2.		
	1. 美人如春風	1.				3. 杜鵑花	3.		
	2. 寒江獨釣圖	2.				4. 長春花	4.		
	3. 夜涼會友	3.				5. 雪齋留客	5.		
	4. 美花映竹	4.				6. 亮花聲	6.		
	5. 破屏芙蓉	5.				7. 扇面半月	7.		
	6. 燕子未來	6.				8. 佳人鑒鏡圖	8.		
	7. 竹間移榻	7.				9. 漁樵問答圖	9.		
	8. 單于昭君夜坐	8.				10. 明皇貴妃并笛	10.		

詩、真玄白号太 駢麗、〔11〕清播号心 講説、
称叢林四絶」という。『蔭涼軒日録』
は、惟肖が絶海の画贊に和してさら
に江西が和したのを、惟肖が推崇と
断じて削った、という話を伝える。〔12〕
惟肖の自負と共に、かかる挿話を記
録するところに、二人を対比して観
察した同時代の関心が語られてい
る。東福寺友社はやや色彩を異にし
た。〔13〕『花上集』の構成はかかる詩壇
の状況が反映されていることを知る
のである。

『北斗集』⁽¹⁴⁾は、同じく七絶の選集であるが、七人の作者は『花上集』の作者にごく親しく、すぐ後続する人々で、意識的に重複をさけた編集とみえる。⁽¹⁵⁾『百人一首』と共に相続してこうしたアンソロジーが編まれたのは何故か。その理由が推定できれば、それが本集のもうひとつ性格を語る筈である。

長享三年六月は「序」の年記の一
月後である。その二十八日細川政国
の養子東啓瑞朝の楞嚴頭勤仕を祝つ

〔第一表〕『花上集』作者名・作品順序一覧表

作 者 名	統類從本ノ作品 順序ト題	慶大本ノ作品 順序ト題(異 題ノミ)	「百人 一首」 ニ収ム モノ	「中華若 木詩抄」 ニ収ム モノ	作 者 名	統類從本ノ作品 順序ト題	慶大本ノ作品 順序ト題(異 題ノミ)	「百人 一首」 ニ収ム モノ	「中華若 木詩抄」 ニ収ム モノ	
義堂周信	1. 子陵釣台	1.	○		惟肖得岩	9. 賛李長吉	9.	○	○	
	2. 雨中対花	2.				10. 种放扇華山圖	10.			
	3. 対花懷旧	3. 対雨懷旧				1. 長樂鐘声	1.			
	4. 山水軸	4.				2. 山齋夜雪	2.			
	5. 同	5. 又				3. 看春雨	3.			
	6. 送人帰京	6.				4. 翡翠	4.			
	7. 留別故人	7.				5. 凤雛	5.			
	8. 夢梅	8. 墨梅				6. 睡足軒	6.			
	9. 杜甫騎駒圖	9.				7. 和靖隱廬圖	7.			
	10. 楓橋夜泊圖	10.				8. 李白觀瀑圖	8.			
絶海中津	1. 折枝芙蓉	1. 打枝芙蓉				9. 四皓園棋圖	9.			
	2. 春夢	2.				10. 白頭公	10.			
	3. 鐘声	3.				1. 山水小舟圖	1.			
	4. 花下留客	4.				2. 除夜有所思	2.			
	5. 僧窓移蘭	5.				3. 送人之伊陽	3.			
	6. 論杜牧集	6.				4. 上林曉鶴	4.			
	7. 春夜看月	7.				5. 家童放鶴圖	5.			
	8. 喜行人至	8.				6. 茅舍燕	6.			
	9. 梅花夜処圖	9.				7. 残雪	7.			
	10. 鵠	10.				8. 有待	8.			
太白真玄	1. 春湖孤舟	1.	○	○		9. 梅影	9.			
	2. 松間接雪	2.				10. 竹影	10.			
	3. 益白菊	3.				1. 秋扇	1.			
	4. 雨中惜花	10.				2. 帰燕	2.			
	5. 琴書自楽	4.				3. 凍鶴	3.			
	6. 隨月詠書	6.				4. 植雲樓	4.			
	7. 移花	5.				5. 曲肱亭	5.			
	8. 春韻	7.				6. 西湖晴雪圖	6.			
	9. 看蒔	8.				7. 東坡墨竹	7.			
	10. 露	9.				8. 松軒對雪	8.			
仲方円伊	1. 梅窓詠易	1. 梅窓詠書易				9. 春初思鄉	9.			
	2. 賛陸放翁	3.				10. 遠山帰鳥圖	10.			
	3. 明皇入蜀圖	4.				1. 竹逕掃雪	1.			
	4. 范蠡泛湖圖	5.				2. 清泉濯足	2. 清泉洗足			
	5. 邵康節像	6.				3. 烧琴煮鶴	3.			
	6. 咸陽宮圖	7.				4. 春江送別圖	4.			
	7. 六橋烟雨圖	8.				5. 丹楓	5.			
	8. 審鏡	9.				6. 椿花	6.			
	9. 寄人	10.				7. 也足軒	7. 題也足軒			
	10. 美人折花圖	2.				8. 落梅山圖	8.			
惟忠通恕	1. 松風闌水圖	1.	○	○		9. 江上夕陽	9.			
	2. 金莖承露圖	2. 金莖露圖				10. 鷗	10.			
	3. 謝人惠草花	3.				1. 蓬萊雲氣	1.			
	4. 新居移梅	4.				2. 長樂宮圖	2.			
	5. 賛孟浩然	5.				3. 承燭夜遊	3. 夜遊秉燭			
	6. 賛王子喬	6.				4. 秋夕留客論詩	4.			
	7. 蓬萊圖	7.				5. 賛林和靖	5.			
	8. 開祐	8.				6. 詠瀾明賈子詩	6.			
	9. 市聲	9.				7. 斑竹管筆	7.			
	10. 鷗	10.				8. 鶴燕	8.			
謙岩原沖	1. 贈漁者	1.				9. 故宮草色	9.			
	2. 夢雪	2.				10. 梅船	10.			
	3. 喜雨	3.				1. 天津橋圖	1.			
	4. 坡仙泛頃圖	4.				2. 多景樓圖	2.			
	5. 潘閭騎駒圖	5.				3. 春城大雪	3.			
	6. 賛王子猷	6.				4. 朝大明宮詩	4.			
	7. 賛王荊公	7.				5. 酒星	5.			
	8. 賛鄭子真	8.				6. 題知足軒	6. 題也足軒			

〔第一表〕『花上集』『北斗集』關係法系

(曹洞宗宏智派)

直翁德舉 東明慧日 別源円旨 紫岩如琳 花上集 文華契選

(臨濟宗黃龍派)

明庵榮西 栄朝 咸叟朗譽 寂庵上昭

龍山德見 天祥 麟 瑞岩龍惺 正宗龍統
花上集 花上集 花上集 江西龍派 北斗集

(同法燈派)

無本覺心 東海巒 源 在庵普在 日岩一光 九鼎竺重
花上集 花上集 花上集

(同 仏源派)

大休正念 鐵庵道生 無涯仁浩 惟忠通恕

(同 大覺派)

蘭溪道隆 約翁德見 寂室元光 靈仲禪英 和甫齊忍 桂林德昌
花上集 花上集 花上集 北斗集

(同 燄慧派)

虎岩淨伏 明極楚俊 草堂德芳 惟肖得岩

花上集

(同 聖一派)

円爾 東山湛照 虎闢師鍊 日田利涉 謙岩原沖

花上集

大疑宝信 了庵桂悟

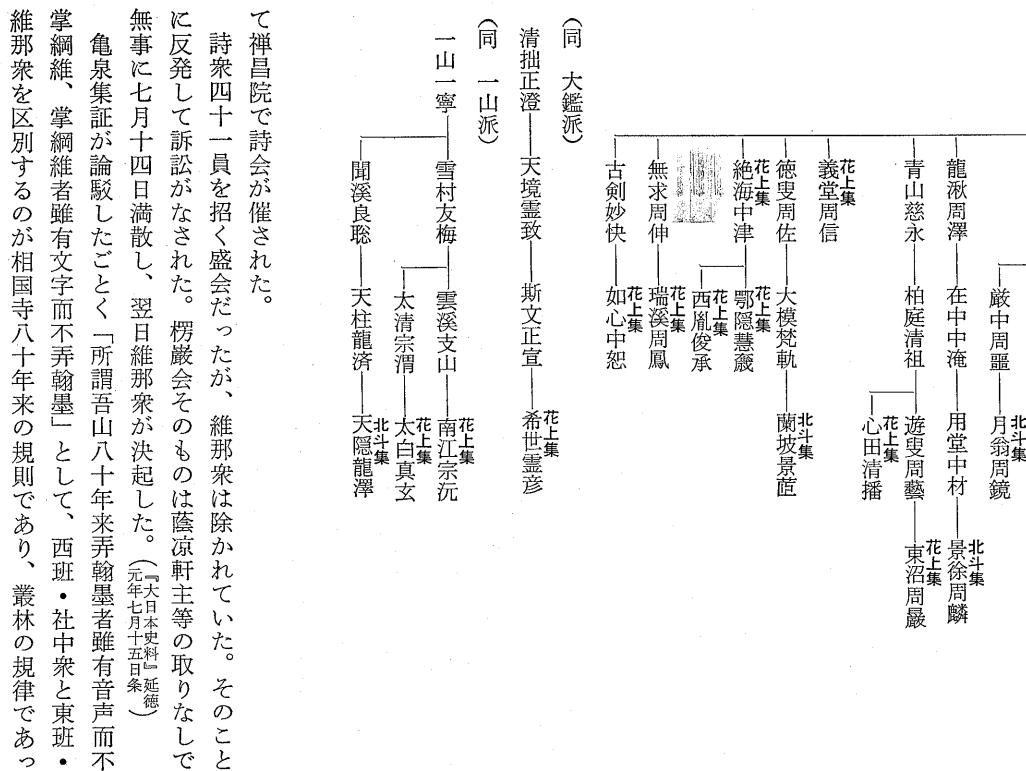
夢窓疎石 春屋妙葩 玉曉梵芳

花上集

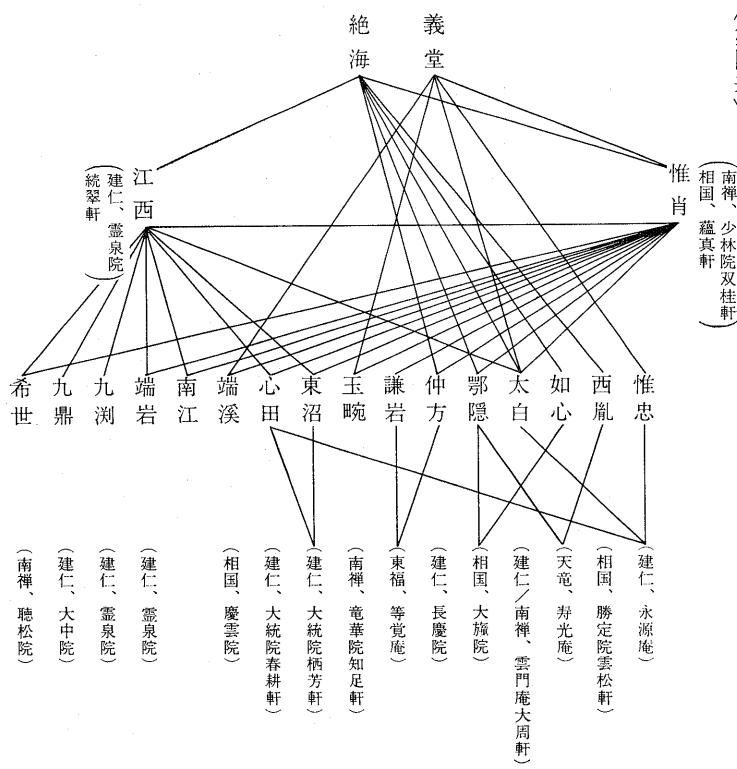
〔同 夢窓派〕

〔第三表〕

義堂周信	1325	1388	
絶海中津	1336	1405	
太白真玄	1357	1415	
仲方円伊	1354	1413	
惟忠通恕	1349	1429	
謙岩原冲	?	1421	
惟肖得巖	1360	1437	
鄂隱慧巖	1366	1425	
西胤俊承	1358	1422	
玉曉梵芳	?	1420 ?	
江西龍派	1375	1446	
心田清播	1375	1447	
瑞巖龍惺	1384	1460	
瑞溪周鳳	1391		1473
東沼周最	1391	1462	
九淵龍蹠	?		1474
九鼎竺重	1387	1463	
南江宗沅	1346	1413 ?	
如心中恕		1403	
希世靈彥			1488



〔第四表〕



て禪昌院で詩会が催された。

詩衆四十一員を招く盛会だったが、維那衆は除かれていた。そのこと

無事に七月十四日満散し、翌日維那衆が決起した。（『大日本史』元年七月）

龜泉集証が論駁したごとく「所謂吾山八十年来弄翰墨者雖有音声而不

維那衆を區別するのが相國寺八十年來の規則であり、叢林の規律であつ

た。それを認めてなお「維那衆一両輩以不与彼会為遺憾」と表明し、敢えて改変を要請したところにこの訴訟の意義がある。寺中の秩序原則を揺がす新しい動向が目立ってきていてそれを背景になされた訴訟である。動向とは亀泉自身が「但如某者仮權勢推參于彼場、維那衆之所發

憤、抑有以哉」と認めたような、那維衆を詩会から除くに足る自己規制の弛緩を指す^(補1)。この弛緩は両班の役割分担を「差別」として維那衆が受けとめる事態に至っていた。

已澄頗雖沒一文半字侍其筵、而從領紀綱後至今夏之詩席擯之、依其職賤其人者乎、⁽¹⁶⁾

という糾弾の表現に、訴訟の動機となつた感情が出ている。この場合、訴状の論理は正義を実現するための追求であるよりは、既に蓄積されたある不満と批判に市民権を与えるための、儀式であつたといつていい。批判の対象は特定個人ではなく、詩会の経営を西班牙が独占する前提が崩れて、権勢家と癒着する叢林の負性が体制化している事態そのものであった。

叢林全体を浄化する活力は既になかつたから、結局幕府の介入を待つて妥協がなされた。

於以後有維那衆器用之仁者、如先規可被入社中也、⁽¹⁷⁾

万一於後世有如三師傑出之人才、致訴訟者其時可及糺明歟、⁽¹⁸⁾

という幕府裁許の文言は、形骸化しようとした詩会の経営に、「器用」という理念を導入して、再編を試みたことを示す。器用の論理の前では、社中衆と維那衆は対等になりうることが、確認されたのである。

応仁の乱後、詩僧の地方流浪と世代の交替によって、洛中の叢林は「中央」としての実質を失いつつあった。詩会の乱脈化はその結果であると同時に、叢林内部に、自らのために規範を求める動きが生じつつあつたことが、考えられる。維那衆訴訟事件はこの自淨の動きであつた筈である。そこに一件の重要な意義がかくされている。

『花上集』が訴訟事件の直前に編まれ、やがて『北斗集』『百人一首』がこの時期に編まれたことと、叢林内部の自淨氣運とが無関係とは、思えない。詩会に対する自己点検は、詩にも及ぶべきものであつて、本集

も規範的作品の選定を要請する気運の中で試みられた集ではなかつたか。^(補2)それ故に集に入ることが、作者の詠詩水準を証することになりえないのである。

三

内閣文庫蔵『花上集鈔⁽¹⁹⁾』は『花上集』の仮名抄である。結論部分に「名譽ノ詩ソ」「妙ソ」などの概括的表現がみえるが、詩文に関する巨視的議論はなく、個々の作品の評析に徹するもので、積み重ねられた微視的な注解が展開される。字音の平仄と字義の関係⁽²⁰⁾、異名・故事・故詩句の知識が披露されて、冗舌の体をなしている。『中華若木詩抄』や策彦周良の『蠶測集』にも共通する特長である。

この傾向は論語抄、史記抄、莊子抄などにも多かれ少なかれみられる時代の知的関心の性格ではある。ただ例えば桃源瑞仙の『史記抄』は該博な知識が読者を圧倒する大著であるが、それでも史記を通して同時代の乱世を洞察する巨視的な視座が確保されている(『大日本史料』第八編之二十九參看)。これに對して、詩抄ではこれらの古典も断片化されて故事逸話に変質するのである。

この特長は、著者の所為であるよりは、むしろ詩抄の技術的性格によつて生じたものと思われる。詩抄が作品の修辞上の工夫を解明することは、鑑賞のためであると同時に、いかに詩を作るかの技法を習得することを目的にしたからである。音韻、語義、異名等の詮義はそのためのものであった。この方向性は詩抄の文章に明らかである。

技法は具体的でなければ無意味である。限られた詩評の作業の実際において具体的なものは断片的たらざるを得ない。さらに「抄」は学問的関心の体系であるが、中世における学問は、和漢を問わず、先行する諸説の累積を重んじて独創を軽視したから、詩抄が技法書としての性格と

学としての諸説の積み重ねとによって、微視的世界を形成したことが了解できるのである。かかる詩抄的学習はさらに過剰な修辞的工夫へと詩僧たちを駆りたてたのである。そして『鈔』にみられる右の諸特徴は既に室町期詩壇の基本的傾向であつて、『鈔』はその延長上にあつたのである。

『花上集』の時代の五山文字についてこれまで指摘された問題点の中で、(1)詩文における宗教的性格の稀薄化(2)創作精神の萎縮(3)貴族主義、大門派主義の弊害悪化(4)詩禅論における参禅優位から詩禅合致への移行、などが当面の我々の関心に近い問題点として想起されるべきである。⁽²⁵⁾詩抄の修辞技巧への傾斜は、これらの動向と密接な関わりを持ちながら詩文の分野で表現された特徴であった。こうした同時代の傾向を『花上集』はどのように要約したか。以下に一集の人選の側面から管見する。

四

修辞過剰の詩文よりは言外の意をなお尚ぶ思惟がこの時代にも存した。瑞岩がその一人である。瑞岩の法嗣正宗龍統に瑞岩の伝記「行道記」⁽²⁶⁾があり、その一節に、
師方十七、較其所習、剔髪進具、而侍業於東溪牧、侍香於龍潭潛、
皆其董^(建仁寺)東山席之日也、倘非研精文字、烏知古聖賢所為、專探經史百
氏之書旁及雜說、吹藜繼晷、莫不達明、庵見之、謂曰、文字之學、
於道不為無助、雖說外書、亦可也、然壯歲濡其耳染其目、不以仏語
祖言為先、則逮求離文字法、亦不為有助矣、想汝後必悔、而庵舉外
典中數事、啓問試焉、應答如響、庵展手曰、我手何似仏手、師罔
然、庵呵曰、適來所答無絲毫差錯、才拳箇仏手、便成隔礙、病在甚
處、師曰、不會、庵曰、一切現成、更教誰會、師服膺、由尔舍彼就

此、朝殷夕煉、深得其旨、庵遷瑞龍^(南禪寺)、巾侍以行、其歸東山、亦從之、商確古今、密付秘訣、師年方二十四、庵掩光^(下)略とみえる。修辭を捨て修道に専念する十七歳時の転換の劇的な様子は、「行道記」の構成上、晩年の記事に対応している。

瑞岩の人と詩を論ずる。

凡承仏胄統法胤、所以標準此世者、行為上言次之、仮令其有言者、未必有行、其有行者、未必有言、師卓然獨立於庸縉、攘奪之際、涉世沒齒、毫髮無遺恨者、蓋所以行為上也、不獨其行、其為言、足以為法、其為詩也、不祈新巧、不尚險快、以言外之意為主、觀者不具眼、乃以詩語之巧称之、不直師之一笑也、^(傍点引用者)

先の転向の結果、瑞岩は「不祈新巧」「言外之意為上」詩風を確立したというのである。正宗自身の作風はむしろ新巧險快であつた。にも拘らず詩壇中にかかるあり様を高く評価する価値観があつて、正宗は这一点によつて師を顕彰したのである。

希世^(江西)は先の「蟬闇外藁序」に続いて「然る時に蟬闇^(瑞岩)あり、詩名藉甚、又續^(瑞岩)有るの時に減ざる也、吾謂へり、吾徒の詩あり」とのべて、瑞岩の詩を評価した。その一方で『臥雲日件錄』や『碧山日錄』には、修道の徒としての瑞岩が描かれている。これらは悟得の道につとめてなお惟肖・江西に匹敵する詩人であつたことを伝えて、『行道記』の瑞岩像と重なるものである。『百人一首』には、雲章一慶の後に、『花上集』にも収める「烟寺晚鐘」を収める。『鈔』の評釈は、他詩僧に比べて字義や故事・故詩句の詮義がほとんどみられない。新巧を避けた瑞岩の作風の反映とも考えられる。『中華若木詩抄』が選んだ日本の作者と作品数は第五表の如くであるが、興味深いことに、瑞岩の作は一作も採って

〔第五表〕『中華若木詩抄』所収の本邦作者と作品数
(数字は寛永十年板本の作品番号)

作者名	作品順番号	作品数
西胤俊承	2・30	2
希世靈彦	4・16・32・78・84・86・ 101・125・127・133・143・ 149・151・167・183・189・ 191・215・227・251・257	21
謙岩原沖	6・48・72・92	4
海門承朝	8	1
九測龍深	10・82・175	3
太白真玄	12・229	2
玉曉梵芳	18	1
存耕祖默	20	1
東沼周嚴	22・111	2
南江宗沅	24・117・121・181・185・ 197・201・231・259	9
惟肖得岩	26・76・80・109・115・ 139・153・171・193・195・ 209・237・245	13
天隱龍澤	28・34・40・56・62・ 88・123・135・165・ 179・223・241・261	13
月翁周鏡	36	1
鄂隱慧巖	38	1
正宗龍統	42	1
江西龍派	44・52・60・94・147・ 157・159・187・203・217・ 253	11
蘭坡景蘊	46	1
義堂周信	50・205・211・219	4
月舟寿桂	54・247	2
九鼎竺重	58・80・96・105・141・ 145	6
仲方円伊	64・103	2
信仲以篤	66	1
心田清播	68・249	2
横川景三	74・113・163・169・221・ 225・233	7
絶海中津	98・107・199・243	4
万里集九	173	1
田野夫	129	1
慕哲龍攀	131	1
球書記	155	1
瑞溪周鳳	161	1
如心中恕	177	1
惟忠通恕	207・213	2
別源円旨	235	1
「江南」	239	1
賀純中	255	1

如月の伝記は不明のことが多い。後年叢林を離脱したためらしい。還俗して民間で和漢の詩を講じた、という。月舟寿桂の「跋兒子印^{寿印}吟聯句後」に注目すべき記事がある。

大永甲申臘尾^{一五二四}二十六日、印子詣城北鞍馬寺山、至明年正月四日而出山、凡淹留者中間一七日、柏子于晨、蘭膏于夕、手其經口其咒、孜々不怠、蓋荷天王護法之助也、僅有余暇、則捲簾對山、欹枕聽雪、獨吟聯句、至五十韻、出山之後、逾月榮遷藏局、結制秉塵^塵固默禱応也、頃拜床下、出其句以求點竇、余既点汚者六十句、其内圈者十二句、只恐入道必解今日嘲耶、勉哉、

何事が祈念するところがあつて鞍馬寺に参籠精進し、余暇に詩作に没頭したという。出山の後藏主位にのぼり秉払を勤めるための参籠であった

五

南江の詩が人口に膾炙したそのことについては、『臥雲日件録』の記

かも知れない。「固默禱応」「今日嘲」とあるのは、注(32)の「解説」に引く『繫驢櫻』(惟忠通恕ではない)に「如月譚寿印、一華月舟徒、位止西堂、有俊才名、幼時世称文殊喝食、不克終、故世不知之、族細川、秉払之時有魔」とするのに付合する。あるいは秉払説法の時に問者の禪間に応答できなかつたのか。登龍門での挫折は衝撃であつたと思われる。西堂位にのぼつて一応の出世を遂げて、なおその詩才が悟得修道に専念するのに堪えなかつたことが考えられる。参籠の間でさえ詩作に没頭しないで済まなかつた人である。ことは詩禪の問題に属する。

結局、如月と瑞岩の像は表裏の関係で、瑞岩が仏語祖言の側に身を移したのに対し、如月は遂に叢林を退いたのである。これは如月が瑞岩の詩を評計するのを避けた理由の一端を説明しないだろうか。⁽³⁴⁾

事が適しい。

早旦赴北野二条坊門殿請、主人出迎、少間小童來、侍主人側、蓋舍弟也、能誦古今集序、貫珠琅々可愛、然後又誦絕句詩二首云、小軸卷還君莫嗔、十年疎懶覩吹塵、江湖手熟干雨、若作文章鷗笑人、又云、新築一叢紅牡丹、何圖諸友偶來看、小欄春富春風熱、可咲主人詩尚寒、前詩乃曰南江沅首座作也、次詩則予新居牡丹詩也、不知何人伝去教此童誦耶、汗顏不少、童子十歲、能誦歌詩、敏捷非常兒、⁽³⁵⁾「汗顏不少」とした瑞溪の心情を別として、南江のこの詩が広く知られたことは、異論の余地がない。『延宝伝灯録』『五山雜考』や大徳寺文書中の「祖先詩偈」に、南江の代表作としてみえる。『花上集』にも收める。『鈔』の評釈は次の通りである。

誰モ知ル詩ソ、隨意ニシテ堺ニイラレタ時、贊ヲセラレイト云タレハ、叢林ニイタ時コソアレ、イヤト云テ此詩ヲ作テ返サレタ、名譽ノ事ソ

結構ナ軸ヲ巻テカヘシマラスル、カマイテ腹立ハシアルナ、廢学シテ筆ヲ取事モ無イ程ニ、硯ハホコリハカリソ、江湖一筆取事ハナウテ釣スナトリハカリニ手熟シタヨ、モトノ如詩作リタテセハ鷗カ我ヲ笑フスヨソ、錦鯨卷還^テ客始識意和平^{事ヲ}、杜カ句カラソ^(坤34ウ)

末尾の杜句云々は、杜甫の「太子張舍人遺織成褥段」を指す。『中華若木詩抄』は更に詳しい。南江の詩名は『碧山日錄』『蔭涼軒日錄』『花上集』に詳しい。⁽³⁶⁾『三體詩絶句鈔』に希世が南江の講義を称讚しているのは、その特異な軌跡にも拘らず、叢林の切磋に堪えられぬ才ではなかつたことを語る。江西に学藝を学び、瑞溪とはとくに親密であつた。瑞溪と南江の親交は生活様態の違いからすれば一見奇異に映るが、むしろその交渉にこそ当時の詩壇の性格が出ているのである。何故叢林を離れたかについての明証はない。ただ『花上集鈔』に、⁽³⁸⁾

漁庵ト云テ身持ガ悪カツタソ、和泉ノ境^{〔界〕}へ引コマレタソ、
とあり、心敬の『ひとりごと』に、

和泉の堺にて果給ひし南江、秀たる詩人と申あへりし、是も行儀心綻とは、心敬が一休宗純についても「行儀も心地も世の中の人には変り侍ると聞えぬ」とのべたことに通じる。

一休の破戒について改めてのべることは、省略できよう。康正三年奥書の『一休骸骨』に、「わが身のあるべきをとわれけれハ、ある人申されけるハ、このごろハ、むかしにかほりて寺をいで、いにしへ、道心ををこす人の寺に入りしが、いまはミなてらをいづるなり、見れば必ずにちしきもなく、ざせんをものうく思ひ、くふうをなさすして、道具をたしなみ、ざしきをかざりがまんおほくして、たゞころもをきたるをミやうもんにして、ころもへきたるとも、たゞとりかへたるざいけなるべし、けさころもへきたりとも、ころもへなはとなりて身をしひり、けさへくるかねのしもくとなりて」云々^{(元禄五)、(年板本)}、と断じたところをもつて代えることができる筈である。一休『自戒集』にみえる養叟に対する非難の数々に、かく断ずる論拠を見出すことは困難でない。

これに照應する南江自身の言葉を、その作品中に求めることもできる。⁽³⁹⁾ それらは、「むかしにかほりて寺をい」づる想念が、南江のそれでもあつたことを伝える。ただかかる想念が孤立したものであつては、詩が人口に膾炙することはあらまい、と思われる。

心敬は南江を評して、秀れた詩人であること、行儀心地異相不思議の人であること、の二点を指摘した。注目すべきことは、詩人であることと僧としての存在のあり様とを並列する点である。詩と禪とを分離して混同しないこの視点は重要である。詩を禪から解放するからである。か

かる視点が南江の周辺に既にあったことは留意されてよい。

一体、詩と禪の論がなされねばならなかつたのは、詩が悟得を道とする僧によつて詠ぜられる故である。『花上集』の時代にこの論は、前代の如く詩が禪でありうるかを問う所から、僧の詩が誦するに足るかを問う所へと移りつた。心敬の示した視座は、さらに一步を進めて、僧の詩も作者のあり様とは別に詩の優劣を問うことが可能となるうとしたことを語る。この視座が心敬ひとりに止まらなかつたことは、異相の人南江の詩を人々の広く誦したそのことが証する。学を廃して釣竿に手熟することがその人の詩を愛誦する障害とはならなかつたのである。

換言すれば、求道心が逆説の表現をとらざるを得ない時代に生きているという切迫した共感が人々にあつてのことともいえる。人々の眼に、陽気な仮面を被つた南江の脚下にある暗渠が明らかであつた筈である。^(補5) かくみることで、瑞溪と南江の親交が理解しやすくなる。

六

希世の伝記は正宗の「惠鑑明照禪師道行記」⁽⁴⁰⁾に詳細である。それによれば養父細川滿元の影響が大きい。満元の配慮によつて、青少年期に江西と惟肖から学藝の指導をうけ、四六文の技法も二人から教わる。『蒲室疏』は正宗、月舟へと伝授され、この方面での希世の位置は重要であった。「道行記」も希世が二人の正統な継承者で更に独自の境に至つたことを強調するが、斯界での影響力は大きい。

希世の出自は不明である。七歳の時にその英才を足利義持と満元に寵愛され、後小松院の叡感に入つたといふ。細川氏代々の加護によつて居所塔頭、生活費に不自由しなかつた。かかる権勢家の庇護は、希世も叢林の負性を帶したかに見えるが、官寺にのぼらず終生侍者の位で留まつた点で異例の人である。^(補6)

法語類の作品がないということは、希世が他僧のように法会に参じて観金をうけるために不特定多数の有力壇越に妥協しないで済んだことを示すだろう。

当時の坐公文の流行や先にみた相国寺訴訟事件を省りみれば、希世の生涯は、細川氏との私的関係で貫かれている点も含めて、稀有であった。叢林の外に出ることがなかつたことで惟肖・江西・瑞岩と共に通するが、侍者位に留まることによつて彼らと一線を劃して、南江と稍近い立場にあつたことになる。詩文における立場と廻世のあり様に叢林内の諸問題が集約されているといえる。長享二年六月二十六日、八十六歳で示寂した時の、同時代の人々に与えた印象は深かつたろうと推測される。正宗は「道行記」に「今師之沒也、一時宗匠無愛而所就、四方衲子無戴而所虔、^(中略) 蓋非以予一人私言而惜、天下以乏為天下師者借旃而已矣」と結んだ。その儘信すべきであろう。『花上集』が編まれたのはその翌年五月である。先にみた叢林自浄の動きを背景に、希世の死が一集を編む動機ではなかつたかと臆測する。

叢林の主要な問題を『花上集』は包摂しえたといつてよい。希世はこれらの問題と詩文学藝の継承者として『花上集』を締めくくるのにふさわしい。義堂・絶海以後の詩壇を相國・建仁友社の人々によつて要約して、惟肖・江西・瑞岩・南江、さらに希世を配した『花上集』に編者の深慮がかくされていた、といえるであろう。通説の採る少年僧に、かかる配慮は荷が重すぎる、と考える所以である。

注

(1) 『半陶文集』^三 半陶(己酉集)

有袖一詩卷示余者曰、^{(建仁寺)(奥選)} 玉府文舉少年、天資英発、風流称首也、其執反而密

者、抄近代諸老佳作、為一編、以贈焉、索子一語、冠其首云、余披而視之、空華・蕉堅以下二十輩、師表百世、而摩雲胥、洞冰雪者、走卒知其人、兒童誦其詩、禹無間然、小子何言、小補師標題曰、花上集、蓋擬昔人花間集也、而分子言之、花上从艸、々近於廿、作者廿人、取義在此、亦華為六十之比也、唐宋之間、三高九僧、三十二积、有詩集、行於世、吾徒之從事、嘲風弄月者、其來尚矣、今也粹而編之、膠古高僧之絕絃也、晦、湊消之花、隨頭之雲、非君子之贈也、余嘉執友之益于少年、於是乎書、夏五、(參龍虎集)半陶子、

（2）なお内閣文庫本（一冊）。「浅草文庫」「江雲渭樹」「林氏藏書」等各一類は序の前に「作者目録」を付す。また内藤湖南の『泰仁莊善本書影』（昭和十年三月、大八五に「序」の写真を載せる（花上集江雲渭樹古鈔本一冊）。序の文中に、後蜀の趙崇祚編『花間集』に倣い、かつ花字の艸が廿に近い字義に従つたとみえるが、五山僧が填詞集『花間集』を読んでいたことについて、神田喜一郎『日本における中国文学I』五山文学と填詞（）に論及がある。『花上集』成立の背景を知るために参考を乞う。

（3）文選説は早くは林騫峯『統本朝通鑑』卷第百七十五に「建仁僧文選擇禪林絶唱各十首、（中）號花上集周興作序」云々とみえる。近くは上村觀光『日本禪林選述書目』（『五山文学小史』附錄一）が文選撰とする。建仁寺兩足院蔵『東山歷代』（江戸時代建仁寺学）に「文選契（選題雪住光音山門疏紫岩下、○花上集）」とあるのを参照した説かも知れない。その後岡田正之『日本漢文学史』（昭和四年）は一章を設けて『花上集』を論じているが、文選説を踏襲する。以下本集に言及する論は文選編とする通例である。しかしながら、序に「其執友而密者、抄近代諸老佳作、為一編、以贈焉」とある如く、文選にごく親密な友人が編んで之を少年に贈ったと読むべきである。文選自身が謙譲のために第三者に仮託したことが考えられぬではないが、傍証のない限り文意に沿つて某僧の編とするのが自然である。文選に贈られたの意味で「文選契選の花上集」としたのが、何時まにか文選契の選（神田後掲書に「文選契の編纂」とする）となつたことも考えられる。筆者は、作者人選に伺える深慮からも本集が少年僧の手に成るとするのは疑問と考える。

（4）當時七言絶句を基本としたことについて岡田前掲書五九九頁参照。

（5）『花上集鈔』に江西の詩について「江西の十首ニハアダナガナイソ」とその選詩に贊意を示し、西胤については「一段ノ詩人ソ、乍去此十首ノ内ニハヨイ詩ハイテヌソ」とのべて批判している。慶大本に南江の作品を追加するのもその批判の一例であろう。第一表参照。

（6）玉村竹二『五山文学』第七章第三節

（7）僅かに謙岩原沖は聖一派海藏門派の人で東福寺友社に属する。玉村竹二「近江堅田玉泉・聖瑞二庵の相承と謙岩原沖」によれば大徳寺派下の華叟宗曇と俗縁関係がある。『花上集』作者の中では稍異色の人であるが、一休宗純の『年譜』に「以作者鳴」とある如く詩名の高かつた人で、『百人一首』に入り、義持の「悠然亭詩軸」その他詩画軸の贊にも名がみえる。

（8）『村庵遺稿』下（『五山文学新集』第二卷、四五三頁）に收む。内閣文庫蔵『蟬闕外集』一冊（特六一・二八）（巻頭に「林氏藏書」「浅草文庫」「江雲渭樹」「日本政府図書」各一顆藏書印、巻尾に「昌平坂学問所」印（一顆）は「延徳元年治沂書之」の書写奥書をもつ古写本である。序末に「寛正辛巳仲冬村庵靈彦」の年記があり、文字に若干異動がある。姑く内閣本によつて引用する。

（9）『実隆公記』明応五・十一・十五条

（10）前掲『蟬闕外集』に「蕉雪之詩、俊邁奇逸如駿馬之驟平川也、（江四）統翠之詩、優曇雅健如彩鳳之舞于丹霄也」と表現する。今日流に表現すれば惟肖は「広汎な学藝経籍を学び、博識を以て天下に鳴り、中国古典に対する適確な理解と、これを縦横に駆使する創作」をなし（王村竹二『五山』、江西は「釋僧伝記集成」）、江西は「常識的なものを打破つて、新奇な様式の詩風を樹立」したという（藤木英雄『五

山詩史の研究)。

(11) 『続本朝通鑑』卷第一百五十六

(12) 〔13〕 『蔭涼軒日録』延徳三・三・廿三条

(14) 〔15〕 続群書類從、文筆部五補闕に翻刻。安良岡康作『北斗集』について「題ヲタサレタ處テ、トコノ僧ノ問へト云レタレ、東福ノ僧ト云タソ、サラハ呼カヘセ、其ハ色ノ字ハエ作マイトテ春草ト出サレタソ」とある。

(16) 参照。なお『北斗集』について『続本朝通鑑』は前の引用部分に統いて「村菴没後、禪林詩衰、此後月翁、蘭坡、天隱、正宗、了菴、桂林、景徐七僧詩號北斗集、然不及花上集也」と記す。

(17) (16) 第二表参照。

(18) 〔19〕 『蔭涼軒日録』長享三・七・廿四条

(20) 〔21〕 〔22〕 〔23〕 〔24〕 〔25〕 〔26〕 〔27〕 〔28〕

オ) / 氷輪ハ月ノ異名ソ、氷ヲ輪ニシタ様ナソ(坤39ウ)その他。

(22) モミチハ鳥ノ飛ト云故事アリ、坡詩ニ夕陽楓葉見鴉翻(乾3オ) / 嶺瀬ト云ハ所ノ名モ子陵カ事ニナルソ(同) / 駒ハウサギ馬ト云者ソ、耳ガ長イ程ニ日本ニ云付タソ(乾5オ) / 西風ハ芙蓉ノ故事ソ(乾5ウ) / 南花ハ莊子カ名也(乾6オ) / 坡詩ニモ一幅ノ蒲ト云ハ帆ノ事ソ(乾10オ) / 雪ハ孫康カ故事、蟹ハ車胤カ事ソ、誰モ知タ事ソ(乾12オ)その他。

(23) この点については中川徳之助「五山禪林における詩論の特質」(金子金治論集)『連歌と中世文芸』所収)を参照されたい。

(24) オノ置字ハ両方コブシアワセナ時ヲク字ソ、初心ナ時ハ使ハヌ字ソ(乾28オ) / 重イ故事ヲ軽ノト使タカ妙ナソ、餘ノ寺ノ衆カエニセスカ道理チヤソ(坤30ウ)その他。また九渕龍蹊の『九渕遺稿』は自作についての江西の作詩指導を具体的に記して参考になる。

(25) 芳賀幸四郎『中世禪林の學問および文学に関する研究』蔭木前掲書第三章。因みに『花上集』について、神田喜一郎「五山の文藝」に「文学僧として許されるのは、太白真玄、惟肖得巖、江西龍派、心田清播、村庵靈彦あたりの数人で、とくに村庵靈彦が光っている。(中)しかし、これらの諸家は何といつても南北朝時代の作家のような大きな規模ではなく、いわゆる家数が小さい上に、とくに指摘せられるのは、その作品の発想とか用字とかに日本人臭いところの多くなってきて、いることである。強弩の末という感を免かれない」とする(昭和五十六年『藝術叢叢』所収)。岡田前掲書の批評も「大概一定の型に落ち」云々として略同じである。當時思潮における『花上集』の位置を知るのに参考になる。

(26) 当時の僧が詩作に励んだ様子は次例にその一端が伺える。『臥雪日件錄抜尤』宝徳元・八・廿二条「天龍寺寿村喝食、持五月初至八月中旬一日課之作一百首一卷來、問其年則十五也、不論詩好惡、先可賞其志耳、今叢林喝食、間過丁年、而未弁詩律平仄者、十而八九矣、此童纔志学、以詩自課、可尚也」

(20) 漢周ノ瑞ハ在ニ一鳴中(乾28ウ)(周漢トカウ事ナレトモ、漢ハ仄声、周ハ平声チャホトニ、声ニタヨリズ漢周トライタソ) / 為客恨難禁(坤1オ)(タユルト云時ハ平声、禁中ノ時ハ仄声)その他。

(21) 華鯨ハ鐘ノ異名ソ、鯨ノナク声カラソロシサウナ程ニタトヘタソ(坤38

涉であり、同時代の横川景三も矢張り文章に長じてゐたが、その作風が平民であるのと、よい対照をなしている」とする。

(29) 『臥雲日件錄抜尤』宝徳元・十・六条（惟肖の秉私釣語のこと、禪語末に梵語を用いること）／同二・正・八条（疏末銘に比丘二字を用いることの可否）／同二・四・十八条（心華元棟秉私のこと）／享徳三・四・十六条（象初仲爻入定のこと）／長禄二・二・廿九条（和泉大雄寺に孤峯覺明百年忌陞座に請ぜらること）

(30) 『碧山日錄』長禄三・八・廿三条／十二・十二条／同四・八・十二条／壬九・五条他。とくに長禄四年八月、瑞岩が病をおして鞍智昌運五十回忌拈香説法を勤めた時の「瑞岩和尚力疾拈香説法、皆感其於昌運而不忘契交之意至矣」（八・十三）という記述、その無理がたたって示寂した時の太極の「瑞岩和尚入滅、余出入和尚之門二十余年、慈晦善論所沾不少也、是以哀感不減諸弟、即赴哭於龕前」（壬九）という感想は、正宗の瑞岩像とよく付合する。

(31) 前掲「蟬闇外藁序」に「獨蟬闇之詩、簡而不淺易、新而不恠僻、能蹊繞翠兄之規摹、兼挹蕉雪翁之芳潤」とするのは、正宗の言と照應する。また『続本朝通鑑』に「惟肖江西没後、禪林文字、以惺為宗」とする。

(32) 勉誠社「抄物大系」所収「中華若木詩抄」中田祝夫解説。

(33) 『幻雲文集』統群第十三輯上、四二〇頁

(34) 但しこの点は、如月が瑞岩と作風を同じくして当然入るべき詩を除いたことの論証を要する。その場合四六文に秀でた信仲以篤、心田清播が各一首、瑞岩と親しかった瑞溪が一首であったこと等作品の少ない人と不収の人について、及び希世・天隱・江西の詩が群を抜いて多いこと、の比較的の考察がなさざればならない。後考を期する。

(35) 宝徳四・正・十六条

(36) 『三体詩絶句鈔』聽松和尚抄二（蓬左文庫所蔵）

(37) 〔希世〕建仁沢天隱、聞沅南江之講、馬頭初見之詩、一日天隱通村庵、茶話之次、翁問南江之所講、天隱説其儀、翁聞其儀歎美之、

（37）南江の生涯は、終生後堂首座で了えたらしいこと（但し西堂位にのぼつた可能性について、玉村竹一「南江宗沅伝に就ての一疑義」を参照）、隱

逸の志深く、叢林を退いて諸方に偏參、林下に參じ、臨濟曹洞の密參に心を傾け、とくに一休宗純に深く師事した。晩年宗沅の法号は捨てなかつたが漁庵という別号を多く用い、事實上の還俗生活を送つたこと、が知られる。

(38) 玉村竹一『五山禪僧伝記集成』（昭和五十八年五月、講談社）南江の項

「南江のようないい隠逸者が鹿苑僧録を掌るような五山最高位に在つた人と親密なのは、一見不思議である」

(39) 「薪里茆屋図」に「伊昔古帆掛鯨海、親參天澤際咸浮、盲漁斯數事如麻粟、微禹當年魚我民」「寄言姑置京門尹、老矣漁庵落魄身」、「冥鴻翥」に

「老矣漁庵非詩伴、滄浪日落釣篷」、「自咲二首」と題して「仏法衰微走鬼神、今年倍万去年貧、因思磨院筑師伯、酒肉淋漓会女人」「甘露門頭活馬騮、妖声全到虎丘林、会兼不会間容髪、楊柳春風落木秋」、「故人謂余還俗、因題」として「一夜花飛風雨春、滿城流水送香塵、若其不會順朱去、君向瀟湘我向秦」、「僧辞知識、入一休和尚会裡」と題して「焦尾之鱗擺活瀾、諸方蠱惑不相干、洗除貽帽臭衫易、離却閑門破戸難」、「漁庵」と題して「麻骨秋灯吹夜々、桃花春未飽年々、代來欲買新漁具、破却袈裟不直錢」とする文字は、右の一休の問題に通じる消息を伝えるものである。

(40) 『秃尾長柄帯』第六（『五山文学新集』第四卷、八六頁）。正宗自筆原本

『道行記』一帖が南禪寺聴松院に現存。昭和五十八年三月、国立京都博物館で開催の「南禪寺の名宝」展で一見することを得た。末尾に『長柄帯』にない左の識語を収める。

歲次玄黓困敦林鐘仲満壬子也／五山之上南禪々寺前住山比丘群玉峯叟龍統撰

（印）（印）（印）

さらに景徐周麟自筆で「是乃靈泉大士所製之村庵老禪行狀也、予借之而看中攸欠者、予曾聞幼歲作詩獻」として靈彥幼時の詩を補い、また異筆で「長享三年六月十二日」の年記がある「村庵和尚禪師号」が書加えられており。この中景徐識語は『翰林胡蘆集』に収む。

(41) 『東福寺衆雜稿』に「自國師伝之惟肖・江西二老、々々伝之村庵、々々傳之正宗、々々傳之月舟」とあり、月舟の『蒲室集抄』に「吾聞諸蕭庵、正宗々々

蕭聞諸村庵、村聞統翠之說」「村庵師、応蕭庵翁之求、以講蒲室疏、始于

(四年)

寛正癸未閏六月十四日、終于文正丙戌十一月初四日、蓋歷歲者四、其壁全

矣、村師每譲之、蕭翁隨而抄之」とある。

(42) 「偶有講、則深造桂・翠精奧、其余之說、是者取之、否者捨之、故捨一

(惟道)(西)

決於己、而出自得之妙、至其義岐制裂支分、沈思細慮、事覈旨微、發其言

則肄弁簸沸、通博無碍、其人雖再生說尽、而俾人服膺、無以踰之」

(43) 横川景三の「補庵」号は希世の命名により、『京華集』の名も希世に依る。その相国入寺法語に添削を永めて「華袞之榮、莫大焉」と感激大書した。琴叔景趣の「蓋村庵平素、一語不溢発、々則如精金美玉、有定価然矣」という言葉も希世の世評を証する。『中華若木詩抄』に収める作品の圧倒的な数もその一証である。

(補1) 例えば次の様な宿老の嘆息の例は多い。

「其齡十歲、許野童、持歐蘇手簡唐本一卷來、欲沽之、昌子以十錢與之、則与本、吁可嘆也、愚乃手之告諸徒曰、古叢林志學者無老少皆寫此一本、以為造文之捷徑、今丁衰世如上何也、學之衰可知耳」(藤文明十九)

(補2)

他に江西が唐宋金元の絶句千余首を選んだ『新選集』、慕哲龍攀が江

西の選を除いて同じく千余首を選んだ『新編集』、天隱龍澤がこの二書から抄出した『錦繡段』、さらに月舟寿桂が天隱の選を除いて二集から抄した『統錦繡段』がある。略同期に相続していることが注目される。

(補3) 心敬と南江の交渉を語る例として、心敬から南江に贈った連歌書がある。奥書に「右一帖依競望宗沅禪門白地染短筆／段左道々々／應仁二二曆暮秋末五日 隱士心敬(花押)」とある。(赤星鉢馬氏藏、心敬遺稿、三四六一四四七一)

(補4)かかる共感はたとえば次例の如き試行錯誤の蓄積があつてのことである。

「瀟碧出自常光派下者也、講諸講諸錄、以集五山之僧者、抄碧岩諸師之講、為大鉅冊十冊、以悟心・大灯・遠山諸師之說、分之於各處、而以己之義、判焉批焉、專取大灯之說者也、使於講舌矣、小補咸其真蹟、予借之贍写、又聽小補之所語者、其小詩一兩首、則有作者之句法也、若令斯人而終身於叢林、則有遂一尊宿耶、一旦逃叢林、而入一隊之中、而開大口以罵言

江湖、豈其不免筋之報乎哉、可戒矣、可慎矣、」(鹿苑日錄明) / 「棠蔭老人、少而出叢林、蕃居城裏、學道者風、而道已得矣、天資粹美、罕見比也、凡有志學入道者、老人降身敬焉、虛心待焉、余亦受知之一也、」(文明乙巳正月廿七日夜參半、沐浴燒香、更衣着襪、整頓威儀、付後事於其徒、端坐而逝矣、如談笑然、一奇事也) (半隣文集二)

(補5) 南江周辺のこの間の事情については、先に拙稿「イタカナモノ」について、「歴史と地理」三一三、昭和五十六年九月において考察した。

(補6) 希世の伝記と作品について、今枝愛真「五山文芸史上に於ける希世靈彥の歴史的地位——北山より東山へ——」(国史学)五四、昭和二十六年二月)、玉村竹二『五山文学新集』第二卷解題を参照。なお『花上集』作者について、惟肖(新集)第一・六卷)・惟忠(同別卷二)・九淵(同別

卷二)・江西(同別卷一)・心田(同別卷一)・瑞溪(同第五・六卷)・東沼

(同第三卷)・南江(同第六卷)

の各々を参考されたい。また如心中恕について、応安元年絶海等に従つて入明、帰朝後も諸山に出世せず侍者位に留めたことが知られている(『天龍雜志』)。生没年が不明とされるが、その詩集『碧雲稿』巻末識語に貞和二年生とする説がみえる。集中の「丙戌年」と題する詩に「太歲重逢丙戌年」とあるためであるが、「重逢」云々は必ずしも丙戌年生を意味しないであろう。没年については「癸巳仲冬十日」序の作があることから、少なくとも応永二十年十一月十日までは生存したことになる。(第三表) 参看。